HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	そろそろ暖簾おろします
Author(s)	武田, 雅哉
Citation	連環画研究, 10, 200-201
Issue Date	2021-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98502
Type	editorial
File Information	renkanga_10_200-201.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『連環画研究』第 10 号　2021 年 9 月

そろそろ暖簾おろします

武田 雅哉

『連環画研究』は、この第 10 号をもって、とりあえずのお開きといたします。2012 年 3 月に第 1 号を出して以来、毎年 1 号、レギュラー、準レギュラー、ゲスト、飛び入りなど、総勢 25 名の執筆陣による、90 本ほどの文章を掲載してきました。著者別の索引をつけましたので、参考にしてください。

ここで、この 10 年のあいだにおこなわれた、連環画をめぐる研究活動やイベントについて、ふりかえってみましょう。

2011 年 11 月から 2012 年 5 月まで、北海道大学総合博物館において、「越境するイメージ――メディアにうつる中国」という展示を行ないました。これは北海道大学グローバル COE プログラム「越境研究の拠点形成」第 6 期成果展示として企画されたもので、期間中、中国の連環画、ポスター、雑誌、グッズなどの展示を常設し、数回にわたるシンポジウムを開催しました。これにはプログラムの技術補助員、宇佐見祥子氏が三面六臂の大活躍をしてくれました。このことをきっかけに、宇佐見氏には、創刊準備中であった本誌の表紙デザインをお願いすることになりました。

調子に乗ったわれわれは、2015 年 4 月から 7 月まで、こんどは京都国際マンガミュージアムで「知られざる中国〈連環画〉～これもマンガ？～」展を開催しました。これは、京都国際マンガミュージアムと京都精華大学国際マンガ研究センターの主催で行なわれたもので、開催までの道のりは、京都精華大学の博士課程院生（当時。以下同）であり、日本マンガ学会の事務を担当しておられた竹内美帆氏に尽力していただきました。展示期間中の 2015 年 5 月 30 日には、貴志俊彦氏（京都大学教授）、佐々木睦氏（首都大学東京教授）、ジャクリーヌ・ベルント氏（京都精華大学教授）等の協力を得て、「〈連環画〉、そのさまざまな顔～他ジャンルとの接点を探る～」と題するシンポジウムも開催され、満員御礼の大盛況となりました。この時の登壇者は、田村容子氏（福井大学准教授）、加部勇一郎氏（北海道大学専門研究員）、佐々木睦氏および武田でした。この展示とシンポジウムについては、本誌第 5 号において、竹内氏が詳しい報告をしています。その年の 10 月 4 日、いつも楽しい表紙をデザインしてくれていた宇佐見祥子さんが、病気のためにこの世を去りました。第 5 号では、同人たちが、彼女の想い出を綴っています。

科研費による研究活動については、

「「乳房」の図像と記憶――中国・ロシア・日本の表象比較研究」（基盤研究（B）研究代表者：武田雅哉。2013～2015）

「連環画の総合的研究」（基盤研究（C）研究代表者：武田雅哉。2016〜2018）
「20 世紀後半の中国におけるイコノテクストの研究」（基盤研究（C）研究代表者：武田雅哉。2019〜2021）
などにおいて、連環画を重点的に扱いました。

このほか、同人が獲得した科研費については、
「20 世紀中国プロパガンダ芸術の多角的研究――ポスター・連環画・様板戯」（基盤研究（C）研究代表者：田村容子氏。2014〜2016）
「1980 年代中国のキャラクター研究――文化的余波と商業的使用を中心に」（挑戦的萌芽研究、研究代表者：加部勇一郎氏。2014〜2016）
「民国期児童雑誌の研究――商務印書館編訳所の活動と児童表象を軸に」（基盤研究（C）研究代表者：佐々木睦氏。2014〜2016）
「中国の連環画における日本文学の翻訳と再創作」（研究活動スタート支援、研究代表者：尹芷汐氏。2015〜2016）
「〈少年〉〈少女〉表象の社会文化史的研究――民国期児童雑誌を中心に」（基盤研究（C）研究代表者：佐々木睦氏。2018〜2021）
「社会主義文化と身体のイメージ：ユーラシアにおける英雄・女性・死者の表象比較研究」（基盤研究（B）研究代表者：田村容子氏。2018〜2020）
なども、連環画に注目した研究を含んでいます。

刊行物としては、武田雅哉『中国のマンガ　〈連環画〉の世界』（平凡社、2017）、武田雅哉編『ゆれるおっぱい、ふくらむおっぱい――乳房の図像と記憶』（岩波書店、2018）を上梓しました。前者は、連環画研究会の同人たちとの交流と、本誌の編集という刺激なくしては書きえなかったものです。後者は、科研「「乳房」の図像と記憶」の成果を形にしたものですが、同人が少なからず参加しています。

『連環画研究』を、10 年をひとくぎりとして閉じるのは、われわれの関心が、「連環画」という、それ自身定義しがたいメディアだけでは、もはや包括しきれなくなったことによります。今後は、図像と文字テクストとの結合、画文一致――「イコノテクスト」という人類のステキな発明品――もちろん連環画も含みます――を研究対象にして、新たな展開を模索していく予定です。

はじめに「とりあえずのお開き」と言いましたが、それはあくまでも、この『連環画研究』という居酒屋の事情です。言うまでもないことですが、これから河岸（かし）を替えて、二次会、三次会、四次会……が、ダラダラとつづくことになっております。もっとしゃべりたいかた、もっとはなしを聞きたいかたは、次の店に繰り込みましょう！

2021 年 9 月 13 日